

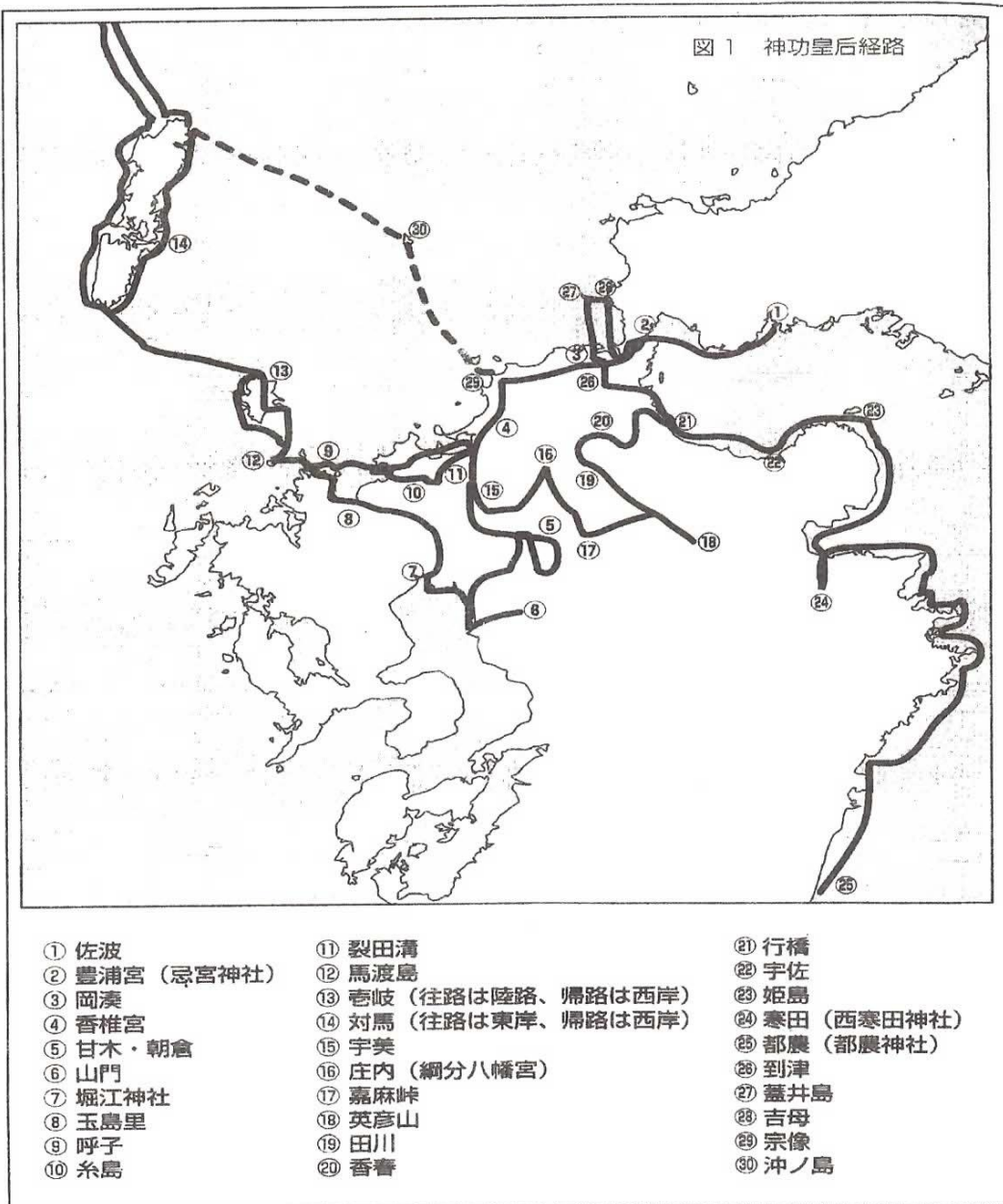
平成 24 年 10 月 13 日 (土) 13 : 30 ~ 15 : 00

福岡県立美術館 4 階・視聴覚室

河村哲夫

北部九州における神功皇后伝承
～第 3 回 神功皇后と朝鮮出兵～

1、北部九州における神功皇后の足跡



1、朝鮮出兵(三韓征伐)

(1)海路は2コース

本軍：名島→博多湾→糸島→松浦→壱岐→対馬→朝鮮

『魏志倭人伝』と同じ伝統的な航路である。・「西の海」コース

別軍：宗像→大島→沖ノ島→対馬→朝鮮

「海の北の道の中」(沖ノ島)コース

(2)船団の規模は約5万人

①佐藤守氏(防衛評論家)は船1000隻、2万5千人程度(一隻あたり25人)ではないかとしている。

②『壱岐名勝図誌』には、「仲哀天皇九年に神功皇后は肥前唐津の神集島で三韓出兵の勝利を祈願し、土器崎(唐津市屋形石)より壱岐に向けて3,270隻の軍船を出発させた」と記されている。3,270隻といえ、1隻あたり25人として8万人を超える規模である。20人としても6万5千人となる。「広開土王碑」の碑文には、「倭軍に応戦するため5万人の歩兵を派遣し、1万余の鎧兜を獲た」とあるから、『壱岐名勝図誌』の数値はまんざらでたらめな伝承でもなさそうである。

③大・中・小の船で混成されていたであろうから、平均して15人とみると、約5万人程度の軍勢となる。佐藤守氏の推測の約2倍の規模である。

(3)船の構造は準構造船

・くり舟に波よけの「柵(舷)」を付けた準構造船であったと考えられる。

『日本書紀』によると、崇神天皇の時代に「いま海辺の民には船がないので献上品を運ぶのに苦しんでいる。国々に命じて船舶を造らせよ」と詔を下したという記事がある。

また、神功皇后の子の応神天皇の時代に、長さ十丈(約30尺)の船を遣らせ海に浮かべると、軽く浮かんで走るように進んだ。その船を名づけて「枯野」といったとある。

・宮崎県の西都原で発見された船の埴輪

船体の下部はくり舟であるが、両舷に船板をつけ、片側に6個ずつ、計12個の櫂ペソがついているから、この船は12人の漕ぎ手がいた。船首と船尾の区別がなく、「ねり櫂」(操舵用の櫂)を使用していたとみられる。

・平成元(1989)年に兵庫県出石町の袴狭遺跡から出土した木製品の線刻画

船団とみられる15隻を描いた古墳時代前期(4世紀)の線刻画。丸木舟に波よけ板などを付加した準構造船。

・三重県松阪市の宝塚一号墳(5世紀初め)の船形埴輪

丸木舟に板を継ぎ足した準構造船で、船首には大刀が突き立てられ、権威を示す2本の威杖とその間に立てられた旗あるいは帆を立てた穴があり、船尾の方には日よけのための蓋が立てられている。船首と船尾は、魚の^{ひれ}鰭のような突起で装飾されている。

(4)船材は九州・西日本各地から調達

〈関西地域〉

- ・『播磨国風土記』の記事によれば、播磨国から魔よけのための赤土が運ばれたという。

〈西瀬戸地域〉

- ・山口県厚狭郡楠町の船木は、楠の大木を伐採し、軍船を造ったことに由来するという。
- ・山口県小野田市の有帆は、船木で造られた軍船に帆を上げたことに由来し、舵浦で舵を造ったという。
- ・山口県小野田市の高泊で、48隻の船を造ったという。
- ・山口県宇部市の櫟原において軍船を建造するため櫟の大木を切り出したという。
- ・山口県下関市の阿内では、「あをち」（あおり風）が吹いて船材の材木が倒れたという。
- ・山口県美弥市厚保は、神功皇后が兵を集める「あつめ」に由来するという。

〈響灘沿岸地域〉

- ・福岡県北九州市門司区の下馬寄で神功皇后は軍馬を集めたという。
- ・北九州市の帆柱山は、この山の木を切って船の帆柱にしたからであるという。
- ・北九州市八幡東区の勝田神社の社伝によると、神功皇后征韓のときこの地の勝山の竹を伐って旗竿としたという。
- ・北九州市八幡東区の大蔵八幡宮の社伝によると、神功皇后が三韓出兵の際この山の竹を取って旗竿としたという。
- ・遠賀郡岡垣町手野の下山の竹を材料に矢を作ったという。竹の皮を剥いで洗ったところが矢矧川である。
- ・宗像郡の鐘崎では竹竿につける赤白の旗を織ったという。

〈筑後川中流地域〉

- ・朝倉郡夜須町の中津屋において、兵器を研がせ、勝山からは旗竿用の竹を切り出したという。
- ・甘木市矢野竹の矢薨竹で矢を作ったという。

〈筑後川上流地域〉

- ・大分県日田郡の山中に船（仙）頭の地名があるが、神功皇后の御座船の船材を伐採し、筑後川を使って運んだ船頭の居住地跡という。

〈玄界灘地域〉

- ・糸島郡の富山の旗竿山で旗竿を取ったという。

〈周防灘地域〉

- ・豊前市の吉木は、神功皇后西進の折、船材の柏木を見て良木といったという。
- ・伊良原（犀川村）の帆柱で杉を伐採して帆柱を取り、城井で木材を伐採し、竹で矢を作ったという。
- ・筑上郡大平村の唐原付近の山の丸太を船材としたので、その山を船丸という。
- ・宇佐市和間ノ浜で48隻の船を造ったという。

2、神功皇后の朝鮮出兵の経路

(1)香椎から出発

①名島を出発

・能古島で住吉の神を祭った。朝鮮から帰国した後に神功皇后は能古島に上陸し、住吉三神の御加護に感謝し、この島に住吉三神の霊を残したところから、残島と呼ぶようになったという。

②姪浜（福岡市西区）・小戸沖を通過

・妙見崎の御膳立という岩礁を通過するとき、神功皇后は船の上で海路の安全と勝利を祈願し、兵士に膳部を下賜したという。このときの祭器と伝えられる銅銚2本が付近の海中から出て、姪浜にある住吉神社及び広徳寺に奉納された。

③下山門

御膳立の岩礁で祭祀を営んだ後、下山門（福岡市西区）で宿泊のため上陸した。

④生の松原と逆松

神功皇后は生の松原で祭祀を行った。松の小枝を手で折り、その枝を逆にして地面に差し、「もし、事なく異国を平らげて帰ることができたならば、この松の枝も生きてしょう」と祈った。神功皇后が無事に朝鮮から帰国すると、その松の小枝は生き生きと育っていた。そこで、その松を「生の松」と呼び、この松原を「生の松原」と呼ぶようになった。そして、逆さまに植えた松を「逆松」と名づけたという。

(2)旧伊都国

①今津・熊野神社

今津の熊野神社は朝鮮から帰還した後、神功皇后によって創建されたと伝えられている。今山は夷魔山とも書かれる。

②野北の新川尻

船を建造するためにこの地の楠の大木が用いられたという。

③皇后石・皇后石神社

火山の麓にある横4尺（約1・2尺）、長さ7尺（約2・1尺）の平石に神功皇后の「皇后石」があり、「皇后石神社」が祀られている。

④白木神社

野北に白木神社がある。新羅のことである。神功皇后は朝鮮から帰還したとき、この地に船で着いたという。

⑤岐志

住吉神社がある。神功皇后は新羅に遠征する前に、この近くの山で住吉の神に花を飾って祈りを捧げた。このため、花懸山と呼ばれるようになり、後に住吉神社を建てて、花掛大明神と号するようになったという（『筑前国統風土記』）。

⑥掛網松

住吉神社の東南に掛網松があり、一本松とも呼ばれたが、神功皇后の御座船の纜をつないだ松という（『飛廉起風』）。神社の西側には東西7尺（約2・1^{メートル}）、南北1丈（約3^{メートル}）の「皇后袖敷石」という岩がある。「龍宮石」あるいは「神宮石」とも呼ばれる。昔から漁民はこの岩に供え物を捧げて大漁を祈る習慣があった。

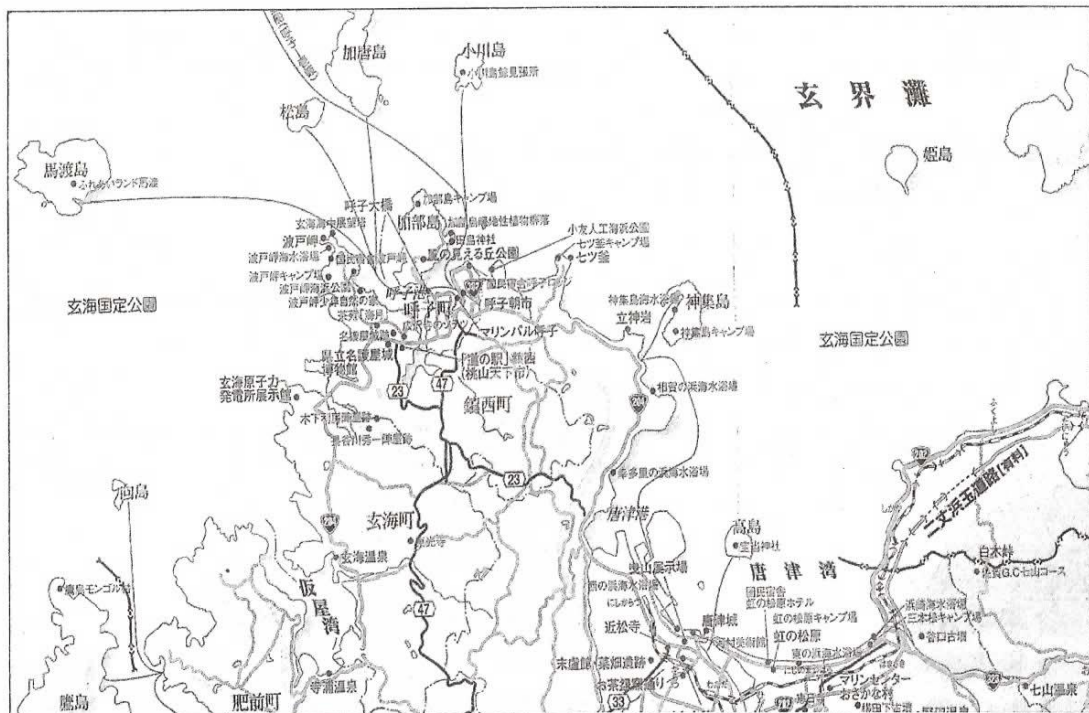
⑦深江・子負原神社・鎮懐石八幡宮

深江において神功皇后の身体に異変が生じた。有名な鎮懐石伝説である。筑前国守であった山上憶良は、天平元（729）年に深江あたりを遊行し、この鎮懐石を詠った長歌が『万葉集』に収録されている。子負原は筑肥線筑前深江駅の西方約七百^{メートル}の「子負原神社」付近といわれており、その南方に「鎮懐石八幡宮」がある。

⑧姫島・姫大明神

姫島という名は、島にある姫大明神に由来する（『筑前国続風土記』）。祭神は豊玉姫と鵜草草葺不合命（日向三代）である。神功皇后はこの地で安産を祈ったという。朝鮮から帰った後、無事に応神天皇を出産することができたため、神功皇后は姫大明神に百個の的射を奉納させた。この例により、毎年二月二十五日に神官や村人たちが弓矢を射る祭りを行うようになったという。

(3)旧末盧国



①神集島

『宇佐託宣集』には、「神功皇后が松浦の沖にて甲衆を集めて饗宴を給ふ処を神集島とい

ふ」とある。『松浦古事記』には、「神集島という名は神功皇后が朝鮮出兵のおりこの島を訪れ、戦勝祈願のため軍神たちを集めたことに由来する」と書かれている。

・住吉神社

社伝によると、「本殿は、神功皇后朝鮮出兵のとき、しばらく滞在なされ、諸神を集められ、干珠・満珠の二宝を納められた神社である」といい、干珠は直径3寸6分（約11 $\frac{1}{2}$ ）、満珠は直径3寸3分（約10 $\frac{1}{2}$ ）の丸い石であるという。

住吉神社はもとの島の弓張山にあった。神功皇后が朝鮮に向かって弓を張ったことから弓張山と名づけられたという。

住吉神社は細長い堤の先端部にあるが、なお未完成の堤があった。神功皇后の朝鮮出兵にあたり軍船を停泊すべき港をつくっているとき、鶏が夕暮れに鳴いたため、不吉だとして工事を途中でとりやめた。このため神集島では鶏を飼うことがタブーとされた。

・評定岩

神功皇后が軍議を行ったとされる評定岩がある。

・丸尾山(麿王山)・丸尾大明神

本宮が置かれたところで、聖地として松が植えられ、「丸尾大明神」という小さな祠が祀られている。

・「コヲソヤマ」すなわち高祖山

武内宿禰の陣営の跡という。

・子濯ぎ川

「高祖川」あるいは「子濯ぎ川」と呼ばれる井戸。武内宿禰が槍で突き掘ったという。

②湊・八坂神社(唐津市湊)

神功皇后の出兵のおり、多数の軍船がこの港に停泊したという。

「八坂神社」は「厄神さま」ともいわれ、旧暦一月十五日の春季祭には、神輿の行幸の前に木灰を振りかける「灰振り祭り」という儀式が行われる。社伝によると、神功皇后が朝鮮出兵のとき海上の霧が濃くて船が進まず、柏の木を燃やした灰をまくと霧が消えたことにちなんで、灰をまいて魔よけを行うようになったという。

③瓦器崎(土器崎)・土器崎明神(唐津市屋形石)

神功皇后を祭神とする土器崎明神がある。神功皇后が神集島で神々にお神酒を捧げて祭祀を行ったが、そのとき用いた土器類をこの地で海に流したため、土器崎と呼ばれるようになったという。

④呼子・加部島・田島神社

・加部島は田島、壁島、嘉部島、神戸島、姫島、姫神島とも書かれる。

・田島神社

「延書式」では「田嶋神社」。主祭神は宗像三女神。宗像大社の所在地は宗像市田島で、田島神社は宗像の田島に由来するという。田島神社は肥前国のうちで最高の格式を有する神社で、宗像大社や出雲大社と同じく田島大社と呼ばれた。神功皇后もこの島に立ち寄り、

航海の安全を祈願したという。

・椎武王の墓

田島神社の西北にある前方後円墳は椎武王の墓と伝えられている。仲哀天皇と兄弟でヤマトタケルノミコトの子。朝鮮へ従軍した椎武王が不慮の死を遂げたため、死後この島に葬られたという。

⑤加唐島と武寧王伝説

・おびや浦

加唐島の伝承によると、身ごもっていた神功皇后はこの島で帯祝いの儀式を行ったという。この着帯式を行ったところが、「おびや浦」という。

・胞衣の鼻

雄略天皇 2 年 7 月、百済からきた池津媛（適稽女郎）が石川楯と通じたので、二人は焼き殺されてしまった。このことを聞いて、百済の加須利の君、すなわち蓋鹵王（在位 455-475）がその弟の軍君（昆支）に身ごもった女性を与えて日本へ派遣したところ、その女性は「各羅の嶋」すなわち加唐島で子を生んだ。これが後の百済国 25 代の武寧王（461-523・在位 501-523）である。島で生まれたことから、「嶋君」と呼ばれたという。

⑥馬渡島

斑島とも書かれ、まれには摩多羅島と書かれることもある。『肥前叢書』に、「太宰府より博多に至り、船に乗り、壱岐に向かふは、柏島（神集島）、波渡（波戸岬）、斑島（馬渡島）と進行すべき」と書かれている。馬渡島と呼ばれたのは、大陸から馬が最初に来た「馬渡る島」であったからという。

・馬に関係する地名

名馬の鼻、冬の牧、馬場ノ辻、馬込などのように、馬や牧場に関係する地名が、数多く残されている。

・馬渡神社（住吉神社）

神功皇后は住吉三神を祀り、島民とともに勝利を祈願したという。その地が「馬渡神社」（住吉神社）である。神功皇后は馬渡島で一泊した。

(4)壱岐

①七湊の浜——鴨瀬・錦浜・七湊・御手洗川

・壱岐に上陸した神功皇后は髪が乱れ、裳が濡れ、海岸を歩くうちに髻（つけ毛）を落とした。このため、その浜は「髻瀬」と呼ばれるようになり、それが後に「鴨瀬」と呼ばれるようになったという。この浜は「錦浜」とも呼ばれるが、それは神功皇后がこの浜で錦の衣を乾かしたからであるという。

・七浜の北側に「七湊」があるが、神功皇后の船が七日間停泊したからであるという。七湊の浜に注ぐ川を「御手洗川」というのは、神功皇后がこの川で手を洗ったからである。

②白沙八幡神社

・七湊の浜近くにある。祭神は仲哀天皇・神功皇后・応神天皇。拝殿に神功皇后の「御掛の石」がある。白沙八幡近くに湧き出る井戸は「御飯川」といい、神功皇后の御飯を炊いた水という。八塚山から流れる清水は「京水」と呼ばれるが、神功皇后が白山神社を通過したおり、この名水をたまたえたからであるという。

③夕部

神功皇后は長岳に登り、夕部に下った。そこに諸神を集めた際、いつ到着したのか尋ねられて、神功皇后が「ゆうべ」と答えたからであるという。この地には神功皇后の「鞍掛石」やゆかりの石臼もあったという。

また、神功皇后は「夕べて今朝うちみればすげのはま今里ならび下るなるらん」という歌を作ったという。

④印通寺

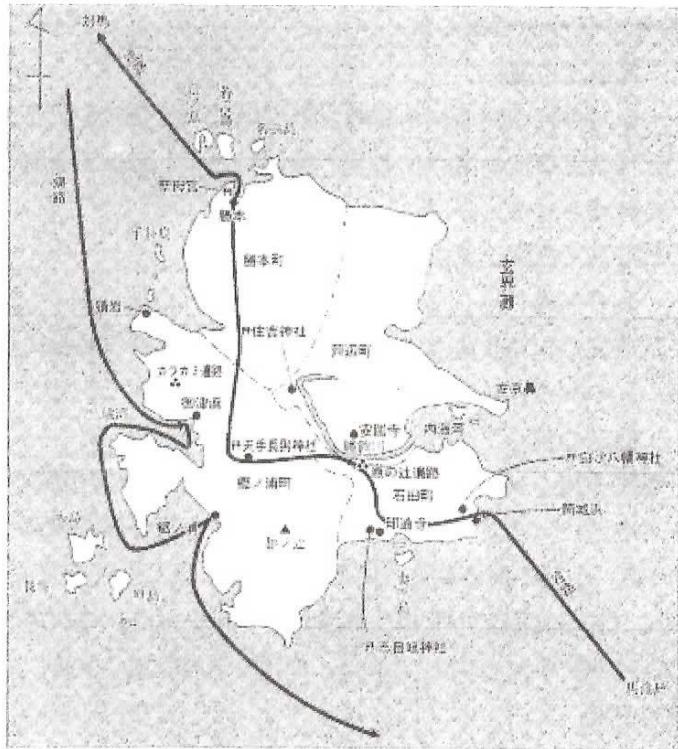
九州本土に最も近い港。印通寺という地名は朝鮮出兵に臆して逃亡を図った一人の王に向かって、怒り狂った神功皇后が矢を射ると、その王の胸を射通したため、「射通」すなわ「印通」という地名になったという（『壹岐国統風土記』）。地元の伝承では、逃亡を企てた王とは、仲哀天皇の異母弟の十城別王という。十城別命が死んだ場所は、「死しき」と呼ばれ、「爾自岐」と書かれたが、その後「志自岐」と書かれ、その近くには「志自岐神社」が祀られた。

神功皇后は印通寺の浜で衣を干したため、「衣が浦」と呼ばれ、後に「君ヶ浦」と呼ばれた。衣を掛けた石は「衣掛石」という。

⑤天手長男神社

幡鉾川の上流に鉢形山があり、壹岐国一の宮の「天手長男神社」がある。『壹岐名勝図誌』には、「一の宮は天の岩戸を引き開けた天手力男命である。鉢形の嶺に鎮座されている。鉢形とは神功皇后三韓御出兵の時、兜の鉢を納められたことに由来する」と書かれている。

『宗像大菩薩縁起』によると、神功皇后の新羅遠征に際し、宗像の神が大いに奮戦し、武勲を輝かした。このとき「御手長」を振り回して敵を翻弄したので帰還後それを沖ノ島に立て置いたという。「御手長」とは旗竿のことである。



⑥住吉神社

芦辺町住吉東触にある。『芦辺町史』によると、住吉三神の加護により朝鮮で勝利を収めることができたため、帰国の際神功皇后が半城湾の御津浜（郷ノ浦町大浦触）に上陸して住吉大明神を奉祀し、後にこの地に移されたという。毎年1月17日、4月28日（現在は5月28日）、10月27日に神功皇后の新羅出兵にちなむ軍越神事が行われる。

⑦勝本・聖母宮

勝本は神功皇后が凱旋して「勝ちを得た」と喜んだことから名づけられたという（『壹岐国続風土記』）。勝本にある「可須」は、「何周」「香須」あるいは「加愁」とも書かれるが、「香椎」とも書かれた。神功皇后ゆかりの香椎宮に由来する。もともと香椎と称されていたが、「ス（シ）ヒ」の「ヒ」が抜けて「可須」となったという（『壹岐名勝図誌』）。

勝本の「聖母宮」（中津神社）は神功皇后新羅出兵の際、神功皇后が一夜にして建立したという。祭神は神功皇后・応神天皇・住吉三神である。地元では「しょうもんさま」と呼ばれているが、聖母大明神、香椎大明神、聖母大菩薩、壹岐国二の宮とも呼ばれる。

(5)対馬

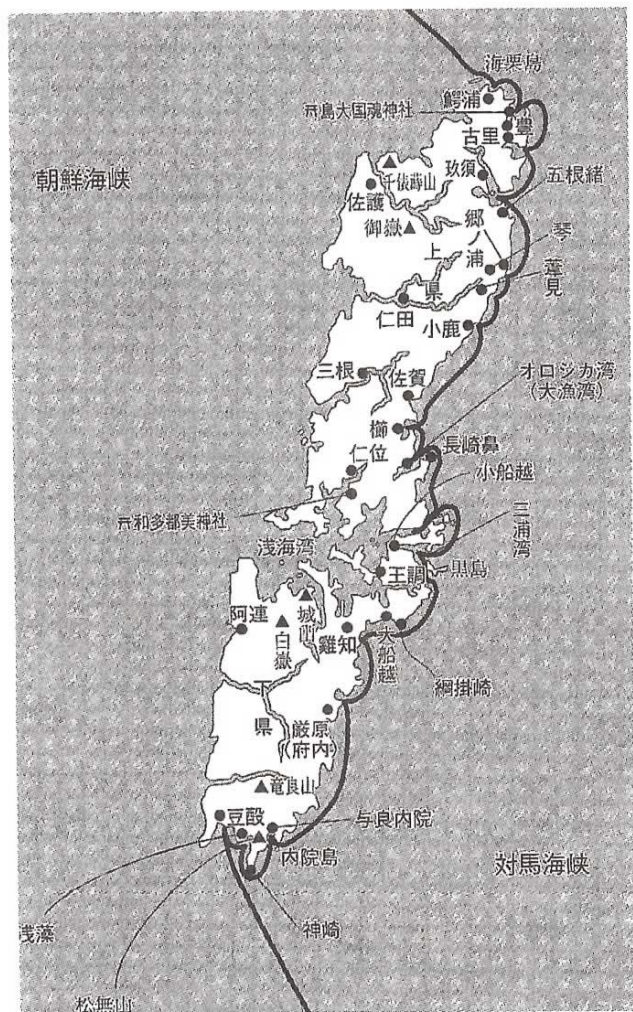
①豆酩・高御魂神社

高御魂神社（下県郡巖原町）があり、「たかみたま」と呼ばれている。古くは「高雄むすぶの神」と称されたという。祭神は高皇産霊尊（高御産巢日神）である。対馬でタカミムスビの神を祀る唯一の神社で、現在もこの地には赤米の神田があり、付近を「神田原」、そこを流れる川を「神田川」という。神功皇后は豆酩に上陸するや、この地を行宮と定め、戦勝祈願のため高皇産霊尊を祭ったという。

②多久頭魂神社

豆酩にあり、天照大神などの皇祖神を祀るとともに、天道信仰の聖地とされている。神功皇后はこの地を行在所を置き諸神を祀ったという。

上県町佐護の天神多久頭魂神社が上官で、豆酩の神社が下宮という（『津島紀事』）。



③与良内院

与良内院は、「浮津浦」とも呼ばれた。浮津とは船のことで、神功皇后が朝鮮へ出征する際にこの浦に泊まったため、浮津浦と呼ぶようになったという。

④巖原・中村

明治時代まで対馬藩の首都であった巖原は、律令時代には対馬国の国府が置かれていた。文明 18 (1486) 年に宗貞国が上県郡峰町佐賀からこの地に行政府を移し、以降約 500 年にわたり対馬藩の首都であったため、府中と呼ばれた。明治 2 年に、府中は巖原と改称された。府中市街地にある八幡宮神社の所在地を「伊豆波留」と呼んでいたところから、巖原としたものであった。

巖原の中村において、神功皇后は祭祀を行った。中村の八幡神社は、神功皇后三韓出兵の際の祭祀場所として、天武天皇 4 (675) 年の勅により、同 6 (677) 年に創建された。

⑤阿須湾

神功皇后の水先案内をしていた志賀島の安曇磯良がこの浦で神功皇后の船を出迎えたところから、安曇すなわち阿須と呼ばれるようになったという (『津島紀事』)。

⑥砥石淵

阿須川を少し上り、巖原本川の上流と交わるあたりに、砥石淵 (巖原町) というところがある。この地において、神功皇后は矛を研がせたという。

⑦雞知・住吉神社

神功皇后が城岳に登って四方を眺めたところ、遠くに鶏の鳴く声を聞き、初めて集落があることを知り、このため雞知と名づけたという (『津島紀事』)。

住吉神社があり、「雞知宮」とも呼ばれるが、住吉三神ではなく、鶺鴒草葺不合尊・豊玉姫・玉依姫を祭神としている。

⑧綱掛崎

岬を迂回しようとして暴風雨に遭遇した。『津島紀事』には、「本宮伝にいう。神功皇后阿曇 (阿須) 浦を発し、北に赴くとき、天にわか陰り、風雨たちまち起こり、雷電烈しく、激浪天を蹴り、御座船危ふし。ここにおいて、皇后、安曇磯良を遣はし、海中にて海神を祭らしめ、ともづなを岬の前巖に投げかけて船をつなぎ、難を避けることを得た。よって綱掛と名づけくなり」とある。

⑨櫛

久志とも書かれる。神功皇后がこの地を訪れ、玉籤の神を祀ったところから、「クシ」と呼ぶようになったという (『津島紀事』)。

⑩小鹿

神功皇后は朝鮮出兵の途中、この山の牡鹿を獲って群臣に振舞ったという。このため、この土地は小鹿と呼ばれるようになったという (『津島紀事』)。

⑪葦見

鷺見のなまったもので、神功皇后がこの地を通過したとき、鷺が飛翔するのを見て弓を

射、吉凶を卜したという（『津島紀事』）。

⑫琴・琴崎

神功皇后は武内宿禰に琴を弾かせて、祈祷を行ったという（『津島紀事』）。

岬の先端に琴崎神社があり、神功皇后の行宮の跡という。社伝によると、神功皇后がこの琴崎の海辺に船をつないだとき、船のイカリが海に沈んでしまった。そこで、安曇磯良が海中に入り、イカリを取り上げたという。

⑬五根緒

地元の人々は、「ごねう」あるいは「ごにゅう」という。もとは「御入浦」であったという。神功皇后が朝鮮から帰還した後、雷大臣（中臣烏賊津連）父子が舟志湾の北側にある浜久須に到着し、案内の安曇磯良がこの土地に上陸したので、御入浦と称したという。

⑭豊・島大国魂神社

豊という地名は、神功皇后が新羅よりの帰路に矛と剣をこの地に献納して本邦の豊かならんことを祝したからであるという（『津島紀事』）。

豊の小島に「島大国魂神社」がある。延書式内社で素戔鳴命が祭神である。「島首神社」あるいは「島頭大明神」とも呼ばれる。社伝によると、スサノオが子の大己貴命と五十猛命を率いて新羅の曾尺茂梨（曾尺茂利）の地へ渡ったときの行宮の地であるという。神功皇后は朝鮮帰還後に豊に立ち寄り矛と剣を献上して祭祀を行ったという。

⑮鰐浦

『日本書紀』は、「冬十月の己亥の朔辛丑(十月三日)に和珥津より発ちたまふ」と書いている。

(6)対馬から朝鮮

『古事記』『日本書紀』によると、神功皇后らは順風に恵まれたようである。梶や櫂を用いる必要もなく、帆だけで朝鮮へ近づいていったという。対馬の鰐浦から釜山までは約50^{キロ}。『古事記』は、神功皇后が朝鮮（新羅）へ出兵するさまを、「その御船の波が新羅の国に押し上がって国の半ばまで到りました」というように描写している。

神功皇后はまず朝鮮半島南部の金海——洛東江の河口あたりをめざしたであろう。対馬からも近く、古い時代から倭と交流の深い地域であり、百済や倭とも友好的な加耶諸国の所在地であった。

神功皇后らは、対馬から金海に到達したのち、洛東江を船でさかのぼり、さらに陸上を東進して新羅へ向かった。

3、朝鮮側の記録

(1) 広開土王の碑

① 集安市

高句麗の「広開土王碑」は中国吉林省集安市にある。鴨緑江の中流域にあり、もと「輯安」と記され、3世紀から4世紀にかけて高句麗の首都であった。もともとの首都は桓仁（遼寧省桓仁県）であったが、3世紀の初めに集安に遷都し、427年に平壤に遷都するまで約200年にわたって高句麗の政治の中心であった。

② 国内城

高句麗の代々の王は、集安の国内城を拠点にした。国内城は高さ3~4四の堅固な石積みみの城壁に囲まれ、四隅に石造りの櫓が築かれた周囲2・7^キ余りの長方形の城であった。

③ 丸都城

国内城の北西2・5^キの山岳地帯には別に山城が築かれた。周囲7^キに及ぶその山城は高さ6の堅固な石造りの城壁に守られ、丸都城と呼ばれた。常時大量の武器や食糧が蓄えられ、戦時にはこの山城に立て籠もって敵を防いだ。現在の山城子山城である。

④ 広開土王碑

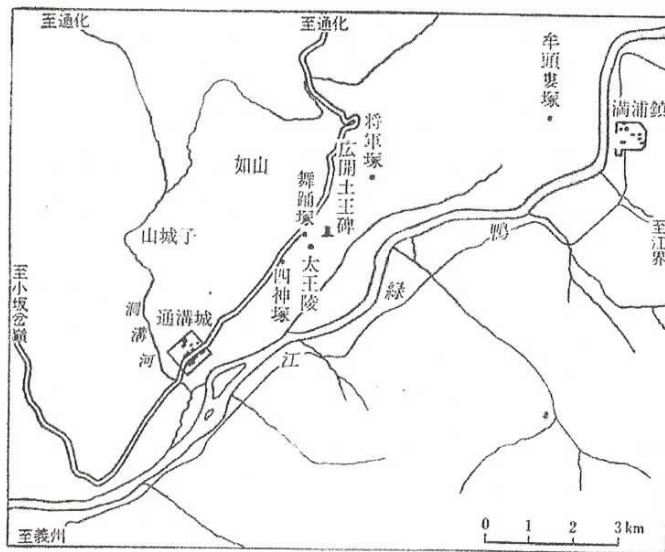
国内城の東北約5^キのところにある。広開土王陵の側に建てられた高さ6・3の巨大な石碑であり、41字詰44行、約1800字が刻まれている。この碑文は明治16（1833）年に日本に紹介された。広開土王碑の碑文は、三部構成になっている。

第一部は、高句麗の始祖鄒牟王の建国伝説と儒留王、大朱留王両代の王位継承が記されている。

第二部は、広開土王の文治と武功が記されている。

第三部は、広開土王の墓守等に関することが記されている。

このうち、第二部に倭に関連する記事が刻まれている。



百殘新羅旧是屬民由来朝貢而倭以辛卯年来渡○破百殘□□○羅以為臣民以六年丙申王躬率□軍討伐滅殘国

「百殘（百濟）と新羅はもともと高句麗の属民であり、高句麗に朝貢していた。ところが倭は辛卯の年（391年）以来海を渡って百濟・□□・新羅を破って、臣民としてしまった。よって永樂六（396）年丙申の年に広開土王自ら軍を率いて百濟国を討伐した」

⑤古代史の定点

倭が初めて海を渡って朝鮮半島へ攻めてきたのは、広開土王が高句麗王に就位した「辛卯の年」、すなわち391年のことであった。これは同時代の広開土王碑という直接証拠によって知ることのできる明確な事実である。いわば「古代史の定点」というべきものであり、年代を論じる場合の確定的な基準点である（「広開土王基準年=391年」）。

⑥日本側の記録・伝承

朝鮮に対して初めて大規模な軍事行動を起こしたと伝えられているのは、神功皇后ただ一人である。

『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』などの奈良時代の主要な文献も、神功皇后の朝鮮への出兵を一致して伝えている。

『続日本紀』『古語拾遺』『新撰姓氏録』などの平安時代以後の文献も、神功皇后の朝鮮出兵を当然の前提として記述している。

各地に残された社伝や地域伝承もこぞって神功皇后の朝鮮出兵のことを伝えている。

(2) 『三国史記』新羅本紀の記事

・ ・ 広開土王碑と完全に一致する記事はない。

①364年

「九（三六四）年夏四月、倭兵が大挙して侵入してきた。王はこの報告を聞いて（倭軍の勢力に）対抗できないことを考慮して、草人形を数千個作り、それに衣をきせ、兵器をもたせて、吐合山の麓にならべ、勇士一千人を斧峴の東の野原に伏せておいた。倭軍は数を頼んでまっしぐらに進撃してきたので、伏兵を出動させて倭軍に不意打ちをかけた。倭軍が大敗して逃走したので、追撃して倭兵のほとんどすべてを殺した」

※これは364年とされている。391年よりも27年前の事件である。安本美典氏の説によれば、神功皇后からほぼ3代前の垂仁天皇頃の時代となる。「広開土王基準年=391年」からみて、この記事は年代を置き間違えた可能性が高い。

②393年

「三十八（三九三）年夏五月、倭軍が侵入して金城を包囲し、五日も解かなかつた。將軍たちはみな城を出て戦いたいと願った。王は、『いまは賊軍が舟を捨てて内陸深くはいりこんで、いわゆる死地にいるので、その鋒先を防ぐことができない』といい、

城門を閉ざして（持久戦にもちこむと）、賊軍はうるところなく退却した。（そこで王はまず勇敢な騎馬隊三百人を派遣し、賊軍の帰路を遮断し、歩兵隊一千人を派遣して独山に追い込み、はさみ撃ちをして倭軍を大敗させ、多くを殺したり捕らえたりした」

※この記事は、広開土王碑の記事と大勢として符号している。391年の事件が反映しているとみていいであろう。

4、日本への帰還

(1)朝鮮・対馬

朝鮮半島からは対馬の「豊」に帰還している。『津島紀事』によると、神功皇后は矛と剣を献納して、「本邦の豊かならんこと」を祈ったという。

豊からは三根湾の「木坂」などに帰還時の伝承が残されているから、帰路は対馬西岸に沿って南下していることがわかる。

(2)壱岐・九州本土コース

・神功皇后は対馬から壱岐の勝本に帰還している。

・勝本と呼ばれることとなったのは、神功皇后が勝利を得て帰ったからであるという。

聖母神社の社伝には、「三韓よりお帰りになるとき、この地に異賊の首を埋め、その上に神符を掛け、後々まで異賊の害を断絶させることを誓われた」とある。

・御津浜において、神功皇后は住吉三神の御加護に感謝し、住吉神社を創建したという。のちに芦辺町住吉東触の現在地に遷座されたが、跡地には、御津八幡宮(郷ノ浦町大浦触字軍越)が祀られた。

・住吉神社の社伝には、「そもそも壱岐国は往古三韓交通の要衝にあたり、ともすれば敵国襲来の門口となるので、神功皇后は三韓出兵から凱旋なさるとき、舟師を当国に駐屯させられ、鎮護の神として住吉大神および八千曳神（大国主神）を自ら祭られ、敵国を降伏させるため軍越神事を定め、随臣の安倍介麿を駐在させ、祭祀の科として壱岐一国を賜い、永く祭祀を司ることとされた」とある。安倍氏代々の子孫は、1月17日、4月28日、10月27日に「軍越神事」をおこない、戊亥（北西）の方角に向かって鉾を振り、三韓降伏のための神儀を行い、1月17日と10月27日の二回はその鉾を御津浜に遷座するならわしであった。神儀を行う場所は、住吉軍越丘（芦辺町住吉後触）、深江軍越丘（芦辺町深江栄触）、志原軍越丘（郷ノ浦町志原西触）という三つの丘とされ、それぞれの場所に軍越神社が祀られている。

・壱岐から九州本土に向かうとき、暴風雨に遭遇したようである。船団は散り散りばらばらになって九州沿岸に漂着した。玄界灘沿岸から有明海に至るまで広範囲にわたって漂着地の伝承が残っている。そして、最終的に香椎に帰った。



地図7 韓半島の前方後円墳
(マルでかこまれた数字で示されているもの)

